

イリノイのキャンパスにて

桜木 健民 (さくらぎ たけおみ)

昭和19年の春、金沢の旧制第四高等学校理科の新入生として、大河千弘君と私は、はじめて顔を合わせた。

当時の中学校は5年制であったが、大河君は、4年終了で進学を許された、いわゆる“四修”の俊才である。早生まれでもあり、私より、2年ほど若い、クラスメートであった。

教室では、さすがに、抜群の才を見せていたが、高ぶるところがない。

学業の面では、及びもつかなかったが、大河君とは、はじめから、馬が合ったようだ。日々の交流の中から、自然に出来上がっていったのは、ほとんどキーワードの交換だけで、気心の通じあえる人間関係だ。

3年間の高校生活のあと、大河君は東京大学の物理学科へ、私は京都大学の化学系へと、それぞれの道を選ぶ。

昭和30年代のはじめ、当時、東京大学に在籍していた大河君は、招かれて、アメリカ・イリノイ大学に、暫く滞在することになる。

当時、たまたま、そのイリノイ大学に留学中であった私が、大河君を待ち受ける。全くの奇遇である。『オウ、来たか!!』『オウ、居たか!!』。ほぼ10年ぶりの再開ではあったが、顔があった途端、二人は高校時代に戻り、あっさりとしたキーワードの交換で挨拶は終る。

それから何年か経って、大河君は、生涯の活動の拠点を、きっぱりとアメリカに移す。イリノイでの体験が、この決心のきっかけになったはずだ。のみならず、やがて令夫人として迎えられる、日本からの女子留学生との最初の出会いも、イリノイのキャンパスであった。

こうして、イリノイという場は、大河君の人生にとって、決定的な役割を果たすこととなる。

アメリカを舞台にして、心おきなく活躍しながら、早生まれの“四修”は、はやばやと逝ってしまった。だが、大河君ともう一度会うのは、それほど遠い先のことではなかろう、と思っている。「オウ、来たか!!』『オウ、居たか!!』。変わらぬ挨拶の交わされる情景が見えている。